

民俗博物館だより

Vol. VII No. 4
1980. 3. 25



ザルづくりの職人（山添村中峯山）

目 次

民俗学カルチャーサロンをおえて	1
台所の民俗展 ―棚元の水とかまどの火― (テーマ展特集)	7
炊事用具 (物質文化⑤)	9
修正会 ―村落の正月行事「おこない」― (大和の民俗行事②)	10
博物館事業報告	12
資料分類目録	14
寄贈図書目録	21
御田祭の祭具 (民俗資料調査抄報①)	23
お知らせ・他	23

民俗学カルチャーサロンをおえて

村井 昭一

当博物館をできるだけ多くの方々に利用いただき、民俗文化に親しんでもらうことと、できれば民俗学にも大いに関心をもってもらうことを目的として、昨年、当館としては、はじめての試みで10回コースの「民俗学カルチャーサロン」を開設した。幸い、83名のご参加を得て、別表のカリキュラムのとおり無事修了し、最終日には、受講者の方々から来年度もぜひ開催してほしいとの有難たい要望もいただいた次第である。

講師をひきうけていただいた諸先生の実に有意義で充実した内容のお話しを拝聴したが、ご参加いただかなかった方々のために、講話のうち、ほんの一部分ではあるが、ダイジェスト版、として私なりにまとめてみた。

私の勉強不足とスペースの関係上、折角の諸先生の講話の意図が十分表現できていない面があるかと思われるが何卒ご容赦願いたい。

なお、56年度は更に充実したカリキュラムで第2回「民俗学カルチャーサロン」を開催することになっているので、多くの方々のご参加（受講費用は当日の入館料 100円のみ必要）をお待ちしている。

〈別表〉

	月日	曜	時間	テーマ	講師	実習
第一回「民俗学カルチャーサロン」カリキュラム	8.31	日曜日	講義・実習共の日 （午後1時30分～3時30分）	民俗学へのアプローチ 江戸時代の旅	当館 館長 村井昭一 竜谷大学 教授 宗政五十緒氏	
	9. 7			大和の伝説と昔話	立命館大学 教授 福田晃氏	
	9.21			宮大工からみた社寺建築	宮大工 西岡常一氏	
	10.5			大和の民家	当館 主任技師 長谷川晋平	大和民俗公園内民家見学
	10.19			村落と芸能	京都府庁 文化財保護課 主査 植木行宣氏	
	11.2			兄 学 会		
	11.16			大和のみちしるべ	奈良教育大学 名誉教授 堀井甚一郎氏	ぞうりづくり実習
	11.30			大和の食べもの	近畿民俗学 代表理事 岸田定雄氏	粉ひき実習
	12.7			民具・農具にみる古人の知恵	大阪市立博物館 主任学芸員 岩井宏実氏	脱穀・選別用具使用実習
	12.21			正月のまつりと民俗学のまとめ カルチャーをおえて	八代学院大学 教授 林 宏氏 当館 館長 村井昭一	しめなわづくり実習

⑤ 出発日には祝い膳で祝す。

江戸時代の旅

竜谷大学教授

宗政 五十緒氏

江戸時代の旅行について、次のような儀礼および制度があった。①旅行することが決まれば、生れた土地の神社へ参り、神主からお守り札を受ける。これを産土神参りという。②親類縁者隣り近所への挨拶参り。このとき餞別をもらう。帰ったときも同じようにみやげものをもって挨拶廻りをする。③家主・町年寄の所へ行って道中手形をもらう。—借金をしている人はここでチェックされる。④檀那寺で身分証明にあたる道中証文をもらう。

旅人を出迎えたり、見送る儀礼として、来る人を迎える坂迎え、途中まで見送る坂送り、関送りなどがある。京都の人が東へ行くときは逢坂山まで、江戸の人が上方へ行くときは品川まで、簡単な例としては、自分達の町内から一歩出たところで見送ることもある。

江戸時代にできた旅行用心集には、文字を知っている人は旅行中、旅日記を書くように定められていたので、硯を持参したり、矢立がよく持たれていた。また、用心集には、旅行中は小量づつ何度も食べるようにと、一度に大食することを戒めている。携帯用食料としては麦の粉を用いていた。

道中で船に乗るときは、船賃以外に船の神

への賽銭をたして渡し道中の無事を祈った。

また、江戸時代は旅館に原則として一泊しかできないことになっていた。今日でも田舎の旅館で泊ると、宿帳に「どこから来て、明日どこへ行く、内容を記載するようになっているのは、そのなごりである。

江戸時代の旅は仕事の旅と観光の旅に大別される。—これは現在でも同じと考えられるが。仕事の旅—参勤交代、朝廷への挨拶、視察、武者修業、品物の買いつけ、借金、勉強、職人の修業、能の家元などへの挨拶、芸人の旅、農民の民事訴訟など。観光の旅—神社仏閣への参拝を目的にしているが、実は遊びが目的の旅が多かった。また、湯治の旅も多く、健康人でも病と称してよく湯治に出かけた。



▲第1回講話



▲第3回講話



▲第4回実習

大和の伝説と昔話

立命館大学教授

福田 晃 氏

大和は日本における最も古い国であることから伝説は豊富である。古くは古事記、日本書紀、万葉集に大和地方のさまざまな伝説が書かれている。

最近では民話ブームであるが、民間説話には政治を変革するような民衆のエネルギーが含まれており、価値があると評す人もある。

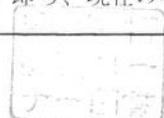
しかし、民話という表現は便利ではあるが、誤解を生じやすいので、少し整理してみたい。民話即ち民間説話は三つに大別される。①伝説は信じられてきた話で、その根拠も、もの、固有の時代、場所、人物で示している。②昔話は内容に責任をもたない。時も場所も人も限定しないで証拠も示さない。そして、空想・仮構のもので、語り出しは、昔あるいは昔々からはじまり、結びは、めでたしめでたしの系統と、これでおしまいの系統がある。話法があって、話の途中で相づちをうって感嘆したことを表現する。③世間話は近頃おきた妙な話珍しい話である。

一応以上の三つに分類されるが、その土地の人の心に密着した話に作りかえられたり、伝説が昔話化したり、伝説が昔話を吸収することもあり、明確に区別されない場合もある。

柳田国男先生は、伝説は信仰であり、昔話は文学であると称されていた。大和の昔話はどういうわけか全国的にみて少ない。大和は伝説の国であることと、文化の波が大和から地方に響いて行く速度が速かったということも考えられる。

民俗学とは、文献や過去の資料も大事ではあるが、むしろそれよりも、現在の生活に伝承されているものを重要視し、これからの生活のあり方を考える学問である。

一つの文化は空間と時間との輻湊した中で築かれるものであるから、過去の資料を全くぬきにして文化を論ずることは当然できない。このことは民俗学にもいえることであるので、民俗学は歴史学とのかかわりの中で「考現学」としての民俗学の持ち味を発揮すべきである。民俗学は考古学ではない。即ち、現在の私達



の暮しに目を向け将来の暮しを考える学問でありたい。それにつながるのが伝説の研究でもある。(昭和6年発行『大和昔話』沢田先生著。昭和8年発行『大和の伝説』高田一郎先生著などの紹介があった。)

宮大工からみた社寺建築

宮 大 工
西 岡 常 一 氏

薬師寺の金堂再建の仕事をひきうけて、まず苦労したのが建築材料として使う良質のヒノキを集めることであった。林野庁へも頼み、日本国中探したがない。あっても木出しのできない場所にある。そこで当時の橋本凝嵐管長のお許しを得て台湾へ出向きヒノキを集めることにした。

台湾の原始林へ日本人は入れないことになっているが、特別の許りで入れてもらった。樹令が1,500~2,500年、直径が3メートル位、こずえが雲の中に入っているような立派な木がたくさんある。1本1本選定をした。

昔から「木を買わずに山を買え」といわれているが、土質、北斜面か南斜面かなどの違いで、木の性質なり、くせが異なるからである。また「木組みは寸法ではなく木のくせを組合せ」ともいわれているが、このくせをよくつかまないと、ねじれが出たり、台風や地震でねじれて元に戻らなくなる。

金堂の設計は、学者の先生2人と私とで東塔を1年半かかって調査し、それを基礎にして設計したものである。しかし、今世紀でおそらく最後だと思われる大規模な日本建築に、コンクリートを一部使わねば許されなかったことは、どうも理解できない。樹令1,000年のヒノキは1,000年もつが、コンクリートは100年しかもたない。強度が全然違う。錦の風呂敷で糞を包むようなものである。

木造建築では瓦も木と同じように大事である。瓦作りは良質の粘土質の土をよくねって、自然乾燥をし、低温で長時間焼いたものがよく、高温・短時間はよくない。

壁について、最近の若い人は間仕切りぐらいいにしか考えていないが、これは日本建築の構造上重要なものである。昔は普請をするこ

とが決まれば、まず木を集めることと、壁土を作ることから始めたものである。木を早く集めることは十分な期間をかけて自然乾燥するためである。壁土作りは良質の粘土質の土にわらを切断してまぜ、毎年新しいわらを補給し3年位ねかす。わらが腐りバクテリアが発生し、いわば白のりのように丈夫な土になる。

電話一本ですぐ建築にかかるような現在の建物とは大違いである。早く、安く、体裁よくといわれればごまかすしか方法がない。ふしがあってもよいから芯まで本当の木を使ってもらいたい。

宮大工は、ものの強さを考え、ものの生命を考えている。仕事をするときは、自分が木になり、石になり、土になりきる気持ちが必要である。

村落と芸能

京都府文化財保護課主査

植 木 行 宣 氏

文化庁では、全国にある民俗芸能は約2万件あると知っているが、実際には3万件位あるのではないかと考える。ヨーロッパにはこのような民俗芸能は少なく、わが国のパリエティーにとんだ祭や芸能はめずらしいとされている。

日本の芸能史を考えると、伎楽・舞楽、中世の中期以降から発展した猿楽・狂言そして能楽、更に中世末期から近世にかけて人形浄瑠璃・歌舞伎へと発達してきた。これが日本の芸能史の山なみといえる。これらのものが民俗芸能の中に断片的ではあるが姿をとどめており、日本の芸能史は化石的ではあるが、生きた資料をもっているといえる。

しかし、山すそになっている芸能文化が、さまざまある中で、消えたものもあれば、世界に冠たる舞台芸術として、古典芸能として現存しているものもある。どういう流れの中に、どういう人達になられて成長してきたか、実は不明な点が多いのである。

奈良の薪能は戦後に復活されたものであるが、江戸時代の薪能の史料からいえば、当時の薪能は古い形式をとどめた特殊なおきな

舞であった。そして、重々しい芸術ではなく、在村して農業のかたわら芸能をもって神事に携っていた人達の横の組織といわれている「権の守一座」が舞ったものであり、今日の四座の太夫は干渉しなかったと史料にでている。

民俗芸能とは、村や町の庶民生活と一体となつて行われる芸能であるが、その民俗芸能が村に必要とした村の生活背景があったことも理解しなければならぬ。

のちになると宮座は、特定の家筋だけが加わる組織である株座と、村の人々が等しく構成員になる村座にわかれている。株座には古風で厳重な祭祀が残されているが、傾向としては村座の方が発展するようになった。

宮座の機能は一つの教育的機能も持っていた。7才までは神の子としていたが、15~16才で若衆入りをし義務と仕事が課せられる。儀礼、芸能などを通じて、先輩達が村の若者をきびしく教育し、肉体的にも精神的にも一人前の社会人に育てるのである。

頭屋制度は現存しており、精進潔斎を要求されるが、一世一代の晴の務めとして自覚している。一方、神事は単に神を祭ることだけではなく、神の権威を加えて一つの共同体を維持して行こうとする思想もある。

大和の道しるべ

奈良教育大学名誉教授

堀井甚一郎氏

中世のころから歩くことがはじまり、室町時代、そして江戸時代になって天下泰平の世には盛んになった。旅人のための地図もその頃から多く出され、関所や宿場が必ず記されていた。

日本の地図は殆んど江戸と京都で出版されていたが、実は奈良にも出版元があった。「絵図屋庄八」(現在奈良市水門町の筒井氏)さんが出版していたもので、当時奈良が交通、観光の中心地であったことを物語っている。その地図には社寺の年中行事が記入されている。

昔、道しるべがどうして必要であったか。それは、宿場を早立ちする人、夜遅く宿場に到着する人のため、夜の道では人に道を聞けないので旅人への配慮からである。このよう

に昔の人は旅人に対して非常に親切であった。

旅は意義ある旅をすべきであり、特に見聞を広げるために人々は旅をしたが、遠方まで旅をする人は少なかった。だから、もし奥州や九州地方で伊勢参りをして帰ると、集会には庄屋の横に座って旅の様子を話し、伝達することになっていた。

道しるべは迷いやすい場所に建っているが、型は自然石、仏の間に書いてあるもの、四角柱、三角柱、平らなものさまざまである。

最も多く建てられた時代は文化、文政の時代である。県内では東大寺、春日大社、興福寺附近にこれらの社寺を案内する道標が最も多い。しかし戦後は、道標の扱いが粗末であったため殆んど保存されていないことは残念である。特に昔、猿沢池の北にあった道標が現在、奈良の春日野グラウンドの見物席の腰掛かわりに使われていることは本当に残念。

県内で古い道しるべは、明日香村にある「右岡寺左長谷寺」(寛文13年)と榛原町松牧にある「右伊勢道左山道」(寛文4年)であり、全国的にもかなり古い部類にはいる。

また、県内にある道しるべで最も遠方の地名を示しているものは、東吉野村鷺家口にある「右伊勢・江戸左はせ・大阪」である。

遠い所で大和を示しているのは、軽井沢の西にある沓掛の宿場に建っている「更科は右みよしのは左」である。

奈良で唯一の一里塚は、国道24号線沿いで知事公舎のある近くにある。参考までに、奈良市の道路元標は市内橋本町(三条通)に、東京は日本橋、大阪は梅田新道(以前は高麗橋)、京都は三条大橋東詰にある。

旅の道しるべを大切にすると同時に、人生の道、即ち人生の旅の道しるべを教えてくれた諸先生にも感謝する気持ちを大切にしたい。

大和の食べもの

近畿民俗学会 代表理事

岸田定雄氏

現在われわれが食用にしている、うるち米が入ってくる前に赤米があった。平城宮跡や飛鳥宮跡から木簡がたくさん出ているが、これらから奈良の都人が、当時赤米を食べてい

たことが判る。現在県下では、榛原町の中村さんが赤米を作っておられる唯一の方だと思われる。

興味のある問題として、パニールでは毎年1月15日にボンカルという祭が行われ、赤米に砂糖を入れて炊き豊穰を願う祭があるが、日本でも昔から毎年1月15日に小豆粥を炊いて豊作を祈る習慣がある。もっともタミールの人の顔と日本人の顔とは人種的には全く違うが、日本での赤米が小豆のことであるなどを考えると、かなり共通性があり面白い問題である。

匂い米もあったが、これも現在では殆んど少なくなっている。しかし普通の米に少しまぜると味がよくなるので、一部の方面では利用されている。現在匂い米は、県下で十津川村にわずかに残っている。

塩は昔から大切にされてきたが、奈良朝の後期には敦賀から北の塩が送られていたようである。江戸期には瀬戸内海で作られた塩が、たぶん大和川、木津川をさかのぼり、あげ浜から馬の背中によって大和郡山に入っていたことが、先般の調査で判明した。大和平野地方の塩についても、20年数年前に当時80才の老人から「瀬戸内海から送られてきた塩を私が初瀬まで運んだ」と直接聞いたことがある。

吉野地方では、檜・椎・栗の実を常食としていた。十津川村では現在でも檜の実を困窮用（非常食）として蓄えている家がある。昔は全国的に大飢饉がしばしばあったため、木の実を食べる知恵が生れ、特に吉野の奥では栗の林がたくさんあったといわれている。天川村の洞川でも、中山半之丞にまつわる有名な話がある。天明の大飢饉のとき、東北地方では111万人の死者を出したが、米が殆んどとれない洞川で1人の死者も出さなかった。これは中山半之丞が以前から村人に栗の木を大事に育てるよう指導をした結果であったといわれている。

昔の御飯はコシキで蒸していたので現在のおこわのようなものであった。その後かた粥、それから汁粥になった。大和の茶粥は江戸期になってからだと思われる。お茶が一般庶民に使えるようになったのは室町以降である。お茶をほうじて茶袋に入れて御飯を炊く――

それが大和の茶粥である。

奈良の御祭のつつぼめしというのがある。これは落ちたもみを拾いあつめて御飯を炊くのであるが、これが晴れの日の食べものであった。昔の生活を知っているおばあさんは、現在のぜいたくな食生活を「この頃はこわいみたいや」といっておられた言葉が印象的である。

民具・農具にみる古人の知恵

大阪市立博物館 主任学芸員
(現国立歴史民俗博物館調査官)

岩井宏実氏

日本での民俗学は柳田国男先生によって、行為、いうなれば非常に精神的な面が中心として発達してきた。それに対して、生活用具を中心に常民の生活を究明しようとすることで生活用具の研究がはじまった。その際、民具の定義を「我々の同胞が生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具、としている。従って、衣・食・住から年中行事・遊戯具など生活全般に亘る。

民具とは、生活の必要性から技術的に作り出された実用性と機能性を重視したものである。それだけに、時代の推移により更に実用性・機能性の高いものが作り出されれば、古いものはなくなる場合もある。しかし、その古い形のものもなくなったとしても、そのアイデアとパターンはそのまま継承される。ここに民具の重要性がある。絵画・彫刻・工芸・考古資料などは、一回きりであるが、民具については、形はなくなってもずっと継承、伝承されることが異質である。

縄文時代の土器の底にすだれの形をしたあみ目状のものがあったが、そのあみ目は、今日の俵あみと同様である。また、手向山八幡宮の御田祭の道具の中に曲物製の大きな桶がある。文政の年号が入っているが、弥生の遺跡からも曲物の断片がたくさん出ている。このように古い術法が今日まで継承されているのである。

昔の生活には曲物がよく使われ、まさにゆりかごから墓場まで曲物であったといえる。実に広範囲にわたり活用されていた。例を一つ紹介すると、巡礼は必ず腰にひしゃくをさして、道中で水を飲むときと、お布施を

もらうときに使っていた。

民具の場合、だれかが便利だと思われるものを創造し、その技術と知恵がみんなの共通の理解を示し、それをある時期共有するのである。そして、それが自分たちだけではなく次の世代まで伝承されて行く。いわゆる民俗文化財として。これが民具であり、われわれの身近にある道具類もこのような歴史をもっているわけである。

弁当箱を例にとりて考えてみたい。プラスチック万能時代には、プラスチックの弁当箱もたくさん作られたが、最近では少なくなっている。夏使うとツユがたまるからである。最近では、柳行李のよさを見直したものや、木製の弁当箱がでている。木曽のめりほ類も百貨店に出廻っている。これは、冬は温かく夏は腐らない利点があるからで、吉野あたりの山仕事をする人などもこの曲物弁当箱を愛用している。

正月のまつりと民俗学のまとめ

八代学院大学教授

林 宏 氏

正月になると年を迎えるというが、これは元旦のご祈祷祈念祭で、米がたくさんとれますように、つまり、いい年であるようにと願う農耕儀礼である。また、一つの考え方として、正月は神道が管理する行事で、お盆は仏教が管理する行事ともいえる。日本の神とは、祖神であり、正月も盆も結局は同じではないかという意味のことを柳田国男先生はいつておられる。

正月の習慣として、江戸時代まで正月に墓参りをした例はたくさんあり、殊に浄土真宗では、彼岸にも墓参りに行かないのにお正月には必ずお参りをしていた。

門松をとりに行くことを門松を迎えに行くといっている。これは、正月を迎えるものであり、また、門松は神の依代であることから当然であろう。

正月を送る行事として、今でもトンドとかドンドといった行事がある。これは正月の送り火である。

予祝行事としては、小正月（1月15日）の

アズキガユがある。アズキガユを田にみだてて、いろんな真似事をする。また、タブーとして、いくら熱くてもふいて食べることを禁じている。これは、田植のときに風がふくことをきらってのことである。

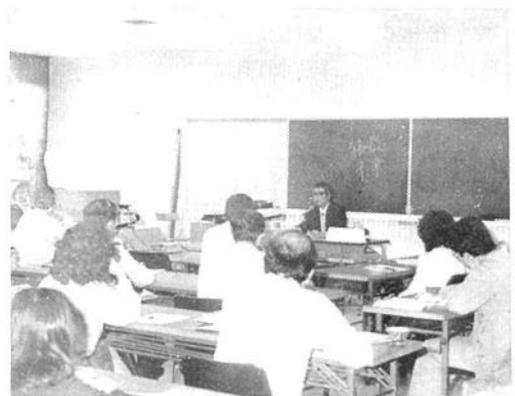
いろんな行事や日常生活の中で、我々が行なっていること、話していること、考えていることなど全てが民俗学の対象である。

伝承とは、伝えることと、うけることである。つまり、先祖のやってきた神様の祭り方とか、世間のつきあい方とか、百姓の仕方などを人に伝えて行くのが伝承である。したがって、民俗調査の根本の問題は、お年寄からお年寄りのものの考え方を十分理解して、聞き出すことであり、そしてそれを記録に残すことである。

民俗学と考古学が非常に似ているといわれるが、考古学は泥の中から発掘したものについて研究するものであるが、民俗学は、一つの史学の体系として、いろんなものを比較してみても、どちらが古いか、どういうふうに変化してきたかなどを研究するものであり、むしろ史学に近い。

考古学の場合、掘れば出ることがあるが、民俗学の場合は、昔のくらしを知っている人が死ねばどうにもならない。このような意味から、今のうちに調査しておくべきことがいくらでもある。私は、民俗学者ではなく歩いて足で聞き出す「民俗屋」がもっと増えてほしいと痛切に感じている。

(当館館長)



▲第5回講話

台所の民俗展 — 棚元の水と^{タナモト}かまどの火 —

浦西 勉

最初に今回テーマにした台所について説明しておこうと思う。台所とは煮たきその他食事をする室（広辞苑）。調理場とそれに続く板の間の食堂兼居間の総称（日本民俗資料辞典）。近世以降の民家では土間に面した板間の部屋をさすが、広義には土間を含めて台所と呼ぶことから、その使い方や名称はさまざまである。一般には土間の隅に竈、流し、水瓶などを配し、板敷の間、大黒柱寄りに炉が切られている。そして単なる食事機能だけでなく、客の接待、針仕事などの単純な作業を行う場所であった（日本風俗史事典）。何も分りきったことをと、言われるかもしれないが、最初に一応の概念を確認しておきたいと思う。上記の台所の説明をまとめると「台所とは炊事する場所、調理する場所、食事する場所をひっくるめた場所をいう」ことになるかと思う。今回のテーマ展の台所もこの意味で使用している。

民家の部屋にはそれぞれ生活に結びついた機能がある。そのうち、炊事、調理、食事の場所としての台所は、生活するうえには重要な部屋であった。

ところで、上にあげた台所の概念から、奈良県下の台所を見てゆくと、次のようなことが言える。たとえば図①の例などを見ると、炊事、調理するカマド、ハシリの土間と食事をするハマイコとダイドコロがあわせて台所ということになる。ここで呼ばれているダイドコロと今回のテーマ展の台所は違うの事を知っておかねばならない。今回のテーマ展の台所は広い範囲の意味で用いている。また図②の例では、炊事、調理するカマド、ハ

シリの土間と、食事するハマイコ、オイエとが台所になる。図③の例を見ると、炊事、調理するカマドとスিজと呼ばれるウチニワと、食事をするダイドコロを合わせて台所ということになる。図④の例では、炊事、調理するタナモト、カマドのウチニワと食事をするヒロシキとカッチとが台所である。このように奈良県下の民家ではたいてい土間の方が炊事調理の場所であり、土間に面した板の間やそれに続く部屋が食事の場所になっている。最初に台所の定義づけをしたのは、奈良県下の民家で呼ばれているダイドコロとの混乱を避けるためである。

さて、私達の過去の生活として、炊事、調理、食事の部屋（場所〈空間〉と言ってもよい）が古代からあったはずで、その歴史を明らかにすることは民俗学の任務である。そのため（不十分ではあるが）それぞれの資料を少し集めたのが今回のテーマ展である。特に今回は表題のサブテーマにした、台所でも重要な炊事、調理のための「棚元の水」と「かまどの火」を中心にして、その変遷と、諸相と、周囲の民具を紹介していこうと思っている。

テーマ①棚元の水

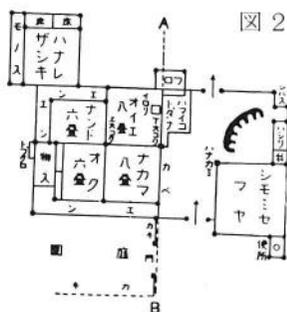
古い時代では、炊事、調理、食事は同一場所であったかもしれない。時代が進んで、炊事、調理、食事をする場所の分化がおこってきたようである。しかし、いくら分化されても台所機能で重要な炊事、調理に必要な水の問題は大きい。どのように台所まで水を運んで来たのか（水源から台所まで）という問題がその一つの問題である。今回、どのような水源からどのようにして台所まで持って来た

図 1



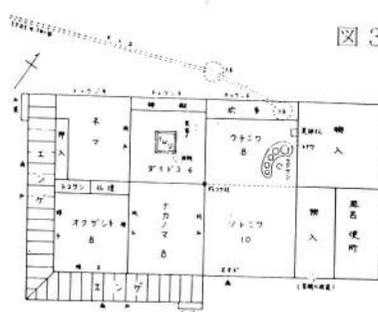
▲明日香村奥山
（『日本民家史』）

図 2



▲高取町越
（『日本民家史』）

図 3



▲川上村伯母谷

（『奈良県川上村大滝ダム関係地域民俗資料緊急調査報告書』）

のかという問題を大きな柱として展示を行なう。奈良県下の場合、どのような水源かといえば、次の通りである。

- ①井戸 奈良盆地全般
- ②谷水 吉野郡地方
- ④川の水 天理市西井戸堂附近
- ⑤池や泉 御所市金剛山麓

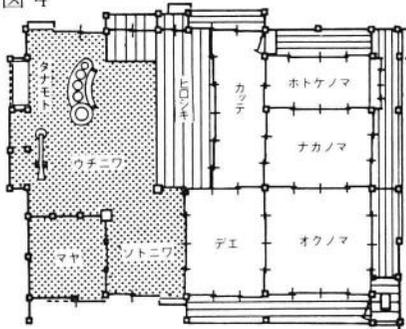
展示では上にあげた、水源から水を取るに必要であった民俗資料を紹介することになる。たとえば、吉野郡地方の谷の水は村人共同で松のトユを作り、家の近くまで引いて来て、木を削りぬいた「水舟」に溜めて、それを水桶（ニナイ桶）でかついで、家の水瓶に溜めたのである。展示では水舟などを紹介する。奈良盆地の場合はほとんど井戸から水が取られた。そのため井戸にまつわる伝承は多い。カナケ水についての習俗や、まじないについての習俗、大師井戸についての伝承なども展示で紹介していく予定である。

テーマ② かまどの火

次に台所においても一つ見ておかねばならぬのはかまどである。かまどは、この上に鍋、釜などをかけ下から火を燃して物を煮炊きするようにしたもので、土や石、煉瓦、鉄コンクリートなどで築き、中をうつろにしたものである。地方によっては、クド、ヘツイなどと言うところもある。このカマドはたいてい土間にある家が多い。炊き口は地域によっていろいろあるが、三、五、七の炊き口のある家が多いようである。それぞれ炊き口の目的が違うようで平群町欒原の例を紹介しておく。

- ① 5升～1斗、味噌仕込みに使う豆を炊く
- ② 1升～2升、主食、粥を炊く
- ③ 牛のどーず（湯）を沸す
- ④ 湯茶を沸す、普通茶釜をかけておく
- ⑤ 別なべ2～5合の主食などを炊く

図4



▲室生村黒岩

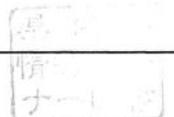
このようにかまどはそれぞれ炊く目的が違っていったようである。たいていのかまどのどちらから一方の端に大きな炊き口のかまどはあり味噌豆や多数人が集った時などに使われた。これが荒神ガマとも言われている。

ところで、かまどの火を起こすのには古くは火錐臼と火切棒によって、火打石と金属とがあった。火錐臼は普通桧が用いられたようでヒノキという名は「火の木」から出たと言われている。この桧で作った火錐臼の上で、火錐棒（火切棒）を錐のように揉んで火を鑽り出す方法であった。また火打の場合、石英を使い、鉄片ですりあわせて火をとばし、火口につけて火を起こした。明治になりツケギやマッチが表われて、火を起こす努力はかなりやわらいだ。うずめ火などによって火を保存するという風習はその意味で大切な生活の知恵であった。

毎日の生活のすべては、かまど中心に始まり、そこで終わるといった場合が多かった。そのためかまどの周囲には様々な民具があった。かまどの火を、火消壺に入れるためのヒバサミ、ジュウノウ、副食を炊いたり魚をやくカンテキ（コンロ）、火を起こす火吹竹、ナベをつかむナベツカミなどの小物から、鍋、釜、カンス（湯沸用）荒神釜などがあった。

かまどは火を使用するため、火の信仰も根強くある。特にかまどの神さんと言われる三宝荒神はその代表である。荒神は不浄をもっとも忌む。だから不浄を除く、家ではかまどの中が荒神の住む場所とされている。三宝荒神以外のかまど神として、『古事記』には「奥津日子神、次に奥津比売命、亦の名は大戸比売神、此は諸人の以ち拜く竈神」としてあがっており、古くからかまどの信仰があったのであろう。その他かまどを中心としたまじないも多い。かまどのすき（土かまどのワラ）はメイボのまじないや、かまどに刃物は置かぬという禁忌などもその一例である。

今日、水は水道、火は電気、ガスになり、台所は一変してしまった。しかし台所の水やかまどの火の民俗の歴史を知るためには、多くの民具や伝承（民俗学）や考古遺物（考古学）や記録（歴史学）によらなければならない。今回はそれを考える端緒になればと考えている。



炊事用具

徳田陽子

奈良県下の自給自足を建て前とした農家の炊事用具について次に少し書いてみようと思う。

昔の炊事場は土間の場合が多かった。その土間のことをニワという。ニワにカマヤがあった。カマドの数は家によって、3個、5個、7個のどれかであった。カマドには、炊飯用の羽釜と湯沸し用のカンスとの二種類の釜を置く家があったが、同じ釜で炊飯、湯沸し兼用している家もあった。現在はカマドの残っている家は少ないが、そういう家では、大勢の客があるときなどに今でも使うという。鍋は2、3個。カマドのそばに、天井の梁から鉤をつるしてヤッカ（ヤカン）をかけておいた。ホウラクは、茶やキリコ（オカキともいう。カキモチのこと）などを煎るのに使った。一度にたくさん焼くときにはアモチ（アンモチ）をホウラクで焼くこともあったという。

ニワの片隅に流し台と水壺（水ガメのこと）をおく家が多い。井戸は、家によってニワにあたり、外にあたりする。井戸の方角は乾（北西）、巽（南東）が良く、坤（南西）、艮（北東）は悪い。金気水であったので、乾の方角に井戸を新しく掘ったところ、きれいな水が出たという話もきいた。水壺の水は御飯を炊くときなどに使い、食器・鍋・釜などを洗うのは井戸端でした。井戸端のタナモト（柱は木、棚は竹で作った）にママ（御飯）用のシャモジ・鍋などをおいておく。

山麓では、きれいな水が湧かないので井戸がなく山の上の池からコボッチョ（竹の節を抜いた筒）で家の裏まで水を送って土にふせた土管で受けて溜めておく家も、水道をひくまではあった。ゴボッチョは土中のもので4・5年、外にでているもので2年もすると、ひびがいたりするので新しい竹に替えた。竹やぶが多いので竹は十分あった。食器類は、土管のそばでバケツに入れて洗い、そのままバケツにふせておくこともあった。

普通使わない食器はカマドの近くの戸棚などに入れておいた。食器のことをゴキ（フタ

付きの椀を指し、御器と書く）と呼ぶところもある。^{註1)}

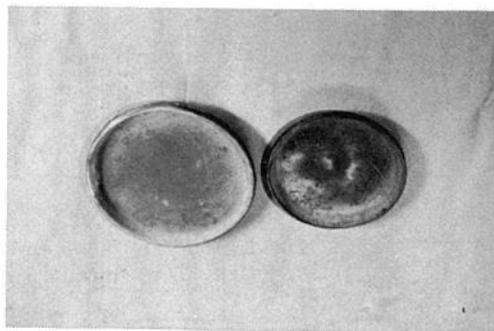
マナイタは、昔は刃物が悪くならないように柳の木で作ったところもある。包丁は魚用のデバと普通の包丁の2本ぐらいを使いわけた。

杓子はみな木製だったが、用途によって、オカイジャクシ：茶粥用の大きな壺杓子。シルジャクシ：おつゆ用の普通の壺杓子。メシジャクシ：飯用の平たい薄い杓子。の3種類にわけられる。壺杓子は店から買ったが、メシジャクシくらいは自分で作ることもあった。家によっては一つの壺杓子で粥にも汁物にも使うところもあった。やがてカネジャク（アルミニウム製）になった。

オヒツは、ひのき製の2升入りの曲物を使った。竹の枠がくだけると、近くの桶屋に持って行ってなおしてもらった。保温したいときは、藁フゴに入れたり、オコタ（コタツのこと）の中に入れたりした。御飯をオヒツに



▲ 萩原家のニワ（カマドの手前が釜、奥がカンス）



▲ ホウラク（大）H 4 cm φ 30cm
（小）H 4 cm φ 24cm

入れ釜からじかに椀につぐことも、忙しいときにはあった。残った御飯は鉢に移した。

コシキは、餅を蒸すときなどに使った。

スリバチは、大小2個ぐらいを使いわけ、ゴマをすったりイモをこねたりするのに使った。スリコギのことをレンゲという。

大根ツキは、大根をみそ汁に入れるために細長くするときに使った。

片口は、樽ごと買ってきたショウユを、日常に使うための入れ物として利用した。塩もカマスで買った。臼の上に板をおいてのせてカマス口から必要とき出した。漬物などで塩はたくさん使った。

米は1年分を、多いときには20俵ぐらいイネヤ(物置)に保存しておいた。戦前は、麦を食べることが多かったとのこと。ニワなどにカラス(唐臼)を据えて米や麦、みそを作るための豆などをついた。米は少しずつなくなったときについた。暇なときや夜なべ仕事で、女の人がつくことが多かった。カマドの火を釜の古いのなどに入れ水をかけた消し炭を干して、粘土などを加えて、カラスでつ

てタドンも作ってツシ(天井)に干しておく。

鍋台や鍋つかみは藁製である。その他、俵・ムシロ・藁フゴなどの藁細工は、男が、雨のときにした。

カマドの燃料のカリシバは1月から3月にかけて山にとりに行き1年分をツシに保存しておくのと、よくかわいたという。笹のことをシバという。笹、ツツジの枝を藁でくくって持って帰る。樫や松の枝や割木は縄でくくって町へ売りに持って行き、必要なものを買って戻ったという。

以上、炊事用具を羅列してきたが、当館蔵の資料を通してみると一つの用具でも木製・土製などの違いがみられる。大和郡山市矢田町の杉本トク氏(明治33年生)、久保保氏(大正2年生)、ハツノ氏(大正10年生)からの聞書を中心に書いた。

註(1)『針ヶ別所村史』昭和44年刊

(2)同 上

(3)林宏氏著『吉野の民俗誌』文化出版局
昭和55年刊

大和の民俗行事 ②

修正会 —村落の正月行事「おこない」—

浦西 勉

奈良県下の農村の正月行事に「おこない」と呼ばれている行事がある。この行事を農村の間では、「おこない」の他、「らんじょう」「初祈禱はつぎとう」などと呼ばれているが、導師となる僧侶は、すべて修正会(二月の場合修二会)と呼んでいる。つまり、この行事を行なう立場によって、同一行事を「おこない」とも言い、「修正会」とも言うのである。

修正会は、寺院において正月に修する法会のこと、東大寺、法隆寺、薬師寺、松尾寺、矢田寺、長谷寺などの大寺院では今も行なわれている。一方農村において、特に山辺郡、天理市福住地区、宇陀郡榛原町、同郡室生村、桜井市などでこの行事が行なわれている。この行事は、村の鎮守の社、ないしお寺にて、僧侶が導師(真言宗か融通念仏宗けいぶつの僧が多い)となつて行なう行事で、村人は花餅はなもちという供物を出し、乱声、カンジョナワ、ユミウチな

どをし、牛玉札ごうおうふだをもらって帰るといふ行事内容である。農村では五穀豊饒を願う要素が強い。寺院の正月行事の修正会と、村人の正月の祈願である、予祝の行事(豊作を願うまつり)とが習合して生まれたのがこの農村に残る修正会(「おこない」)の行事である。

さて、寺院における修正会はどのような行事を言うのであろうか。

大外記師諸勸進記に載する所、天長四年正月、東西寺一七箇やくしほうげか日薬師法悔過らんしょう、修正濫觴か

という記録がある。これは『東宝記』という書物に出ている。『東宝記』とは京都の東寺のあらゆる事柄を記録編集したもので観応三年(1352)にまとめられた書物である。ここでは天長四年(827)に東寺、西寺にて七日間、薬師悔過が行なわれ、それが修正会の始まりであろうかと、この書物の編者が言っているの



である。この文中の「薬師悔過」とは、薬師仏の前にて罪過を懺悔することであって、これが修正会の主だった意味であった。記録によれば修正会には薬師悔過以外に吉祥悔過、観音悔過などがあつたようで、それぞれの仏前にて懺悔する修法であつた。このような仏教法会が、どのように農村の五穀豊饒の予祝行事と結びついていったのかは今のところ十分わかっていない。しかし、次の文を見るかぎり、悔過の法会にも五穀豊饒を祈願する意味もあつたようである。

勅、畿内七道諸國、一七日間、各於二國分金光明寺一行吉祥天悔過之法、因之此功德、天下太平、風雨順時、五穀成就、非民快樂、十方有情同霑此福、

これは『続日本紀』神護景雲元年(767)正月巳末(八日)の條の記事である。『続日本紀』(797年成立)は『日本書紀』の次に記された史書で、神護景雲元年(767年、奈良時代後期)に全国の国分寺に、吉祥天悔過の法を行ない、その功德によって、天下太平、風雨が順調にゆき五穀成就になることを祈願せよとの、天子の仰せがあつたと記されている。

この記録によると、少なくとも全国の国分寺にて、正月の七日間にこの悔過の法会が行なわれて、その祈願の一つに五穀成就がある点、注目しておく必要がある。つまり寺院の修正会は、地方においても農民の豊作祈願と結合しやすい面があるということである。具体的に、寺院の修正会がどのように農村に定着していったかは不明だが、仏教が農村の行事と習合したということは、仏教の民俗化であるということができる。民俗学でのある部門ではこの問題を研究しているのであり、解明されつつある。



▲オコナイのカンジョカケ(室生村深野)

さて奈良県下の修正会(「おこない」)の例は、香芝町下田の鹿嶋神社文書が一番古いであろう。その文書の中に「法楽寺法則次第」〔永正元(1504)年〕の中の正月三日が、この寺の修正会であつたろうと思われる。この記録は宮座(宮を祭る集団)の人々が持っていたもので、宮座の人々が行事の必要な任にあたる記事が記されており、その行事内容の詳細は不明だが、ほぼ修正会と考えてよいと思う。この三日は「ショウコンノコト(莊嚴の事)」として記され、供え物の「ケヒヤウ(花餅)」や「コヲウシャシカミ(牛玉呪師紙)」などの記事から、修正会と思われるのである。「莊嚴の事」は修正会と同一の内容でよばれたのである。奈良県下の農村では中世後期の例があることがわかる。つまりそのころからすでに修正会が村落に習合されていたのであろうと思うのである。

このようにして、寺院の修正会が農村の人人と結びついて、今日県内50村程の例を見ることができる。たとえば室生村深野では融通念仏の僧侶(興善寺)が導師となり、1月8日「おこない」がなされている。村人は宮さんの横にある、堂に集合し、各家からホウゼンツツミ(餅が5~7個入った藁の筒)を供え、男の数だけのフジの木を机に打ちつけランジョウとさわぎたてる。村人は牛玉札をもらって帰る。その牛玉の朱印には「寛政十二年(1800)、極楽寺」と記されている。また、カンジョナワという綱を僧侶に祈祷してもらい村境にかけるのである。これなどは、寺院の修正会と村の正月行事とが習合した一例である。このような仏教と村落行事とが習合した行事が今も奈良県各地に行なわれているのである。



▲オコナイのランジョウ(室生村深野)

博物館事業報告

(昭和53年)
4月～3月

◀博物館事業▶

✦展 示

昭和55年4月5日～6月1日

テーマ展 諸職一町の職人・村の職人一

昭和55年6月7日～9月28日

テーマ展 日々の暮らし一住いと食一

昭和55年10月5日～11月24日

特別テーマ展 農耕儀礼

一御田祭と野神まつり一

昭和55年12月2日～昭和56年3月29日

テーマ展 日々の暮らし

一住いと衣の用具一

昭和55年4月～昭和56年4月(継続)

常設展 稲作・大和の茶・山の仕事・生業
を支えた職人展(各コーナー)

✦移動展

⁵⁵4/15～5/8 太陽神戸銀行西大寺支店(商い用具)

6/19～7/1 南都銀行本店(食生活用具)

9/5～9/17 南都銀行本店(特別テーマ展紹介)

⁵⁶12/20～1/20 太陽神戸銀行西大寺支店(儀礼用具)

1/30～2/13 南都銀行本店(晴れの用具)

3/28～3/31 ニチイ桜井店(大和の民具展)

✦体験学習講座

⁵⁵4月 ゴウリづくり

5月 ナベツカミづくり

6月 コッポリづくり

7月 ウナギモンドリづくり

8月 水テッポウづくり

9月 カゴづくり(I)

10月 カゴづくり(II)

11月 ワラフゴづくり

12月 シメナワづくり

⁵⁶1月 タコづくり

2月 オテダマづくり

3月 竹トンボづくり

✦民俗講座

昭和55年4月13日 PM2～4

●テーマ「伝承としての職人の技術」

講 師 国立民族学博物館助教授 大塚和義氏

●テーマ「職人と芸芸」

講 師 大阪芸術大学教授 村松 寛氏

昭和56年3月29日 PM2～4

●テーマ「食器のあゆみ」

講 師 奈文研・平城発掘調査部 森 郁夫氏
考古学第2調査室長

●テーマ「晴れの民俗」

講 師 成城大学教授 平山敏治郎氏

✦民家講座

昭和55年10月12日 PM2～4

●テーマ「家にまつわる呪いの世界」

講 師 奈良大学助教授 水野正好氏

●テーマ「集落・町並について」

講 師 奈文研・平城宮跡発掘調査部長 岡田英男氏

✦親と子の民俗教室

昭和55年8月2日～3日

●「昔の子供のあそび用具

一竹細工・布細工一

講師(実習指導) 中西浩文氏

講師() 杉本トク氏

●人形劇「ふしぎなバスケット」、他影絵
演出・出演等は佐保女学院短期大学人形
劇「えのぐ箱」の部員による。

✦特別テーマ展講演

昭和55年10月19日 PM2～4

●〈特別テーマ展列品解説〉

解説 当館学芸員 大宮守人氏

●講演テーマ「村落と芸能」

講師 京都府文化財保護課主査 植木行宣氏

✦民俗学カルチャーサロン(新規)

昭和55年8月～12月(10回)

8/1 江戸時代の旅 龍谷大学教授 宗政五十緒氏

9/4 大和の伝説と昔話 立命館大学教授 福田 晃氏

9/11 宮大工からみた社寺建築 宮大工 西岡常一氏

9/18 大和の民家 当館主任技師 長谷川晋平

9/25 村落と芸能 京都府文化財保護課主査 植木行宣氏

10/2 見 学 会 (国立民族学博物
館、他)

10/9 大和のみちしるべ 奈良教育大学 堀井甚一郎氏
名誉教授

10/16 大和の食べもの 近畿民俗学会 岸田定雄氏
代表理事

10/23 民具・農具にみる故人の知恵

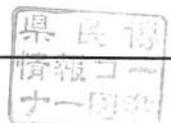
大阪市立博物館 主任学芸員 岩井宏実氏

10/30 正月のまつりと民俗学のまとめ

八代学院大学教授 林 宏氏

✦民俗資料燻蒸

昭和56年3月22日～3月25日



第2次民俗資料収集資料・新規収蔵資料

✦印刷物

研究紀要 第5号
博物館だより Vol VI No.1 ~ Vol VI No.4
御田植祭と野神まつり(特別テーマ展図録)

◀広報活動▶

✦テレビ・ラジオ

55 4月7日 「諸職」展紹介(NHK・UHF
・ニュースワイド640)
4月18日 民俗講座紹介(奈良テレビ、県
政ウィークリー)
4月21日 「諸職」「館蔵小絵馬」紹介(関
西テレビ、奥さまリビング)
6月22日 博物館・公園・民家紹介(読売
テレビ・各駅停車)
12月8日 「住いと衣の用具」展紹介(NH
K・UHF、ニュースワイド640)
12月26日 体験学習講座紹介(奈良テレビ、
県政ウィークリー)
3月7日 「住いと衣の用具」展紹介(奈良
テレビ、県政ウィークリー)

◀日記抄・博物館実習▶

7月5日 大谷女子大学博物館実習(見学)
7月19日 追手門学院大学博物館実習
(見学)
7月29日~8月1日 同志社大学博物館実
習
8月5日~10日 奈良教育大学博物館実習
9月20日 大阪芸術大学博物館実習(見学)
10月25日 龍谷大学博物館実習(見学)

◀管理・運営▶

✦職員

館長村井 昭一 次長山下 勝



▲体験学習講座(タコつくり)

総務係長井村 操 学芸係長奥野 義雄
主事西岡 利男 学芸主事大宮 守人
〃和田 泰子 〃浦西 勉
嘱託岡崎 梅吉 〃徳田 陽子
建造物係長長谷川晋平 嘱託川島 亨
技師 館 俊秀 施設係長藤堂 利明
技師 倉窪 孝

✦人事移動

55 4月1日付 館長 村井昭一、主事 西岡
利男、技師 館俊秀、嘱託 川島亨転入、
館長 川内一郎、主事 吉岡豊、技師 今
西良男転出
54 3月31日付 学芸主事 芳井敬郎退職

✦民俗専門部会

池田源太(龍谷大学教授)、堀井甚一郎(奈
良教育大学名誉教授)、平山敏治郎(成城
大学教授)、岸田定雄(近畿民俗学会代表
理事)、林 宏(八代学院大学教授)

✦民家専門部会

杉山信三(近畿大学教授)、岡田英男(奈
良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長)
吉田靖(奈良国立文化財研究所建造物室長)
青山賢信(大阪工業大学教授)

✦昭和55年度予算(単位千円)

民俗博物館運営費 107,279
職員費 59,897 管理費 39,321
(内訳) { 研究調査費 1,184 広報費 1,016 }
運営費 5,861
公園整備事業費 206,382

◀公園等整備事業▶

✦民家

旧岩本家住宅(重要文化財)復元完了(昭和55年12月)
旧岩本家住宅に伴う防災施設・環境整備
(昭和56年3月)

✦公園整備 ※累計を示す。

公園完成面積 ※10ha
便 所 1棟
照 明 灯 16基
休 憩 所 3棟
植 栽・高 木 191本
植 栽・低 木 3615本
植 栽・芝 生 1100ha
植 栽・中 木 131本

寄贈民俗資料分類目録

(55年2月から)
(56年2月まで)

昭和55年2月より昭和56年2月に至る間、44名の方々から1092点に及ぶ民俗資料をご寄贈いただきました。ご芳名を記し、厚く御礼申し上げます。(順不同、敬称略)

分類番号・調査番号	民俗資料名	数量	採集地	寄贈者氏名
■ 衣・食・住 ■				
(A) 服飾				
A-A 1214	クツワラジ	1	天川村山西	今西 尊男
1258	衣服	1	桜井市大泉	中村 潔
(B) 食事				
B-B 1166	樽型内火式湯沸器	1	奈良市元林院町	中川 巖吉
B-C 1248	ガラス棚	1	桜井市大泉	中村 潔
1249	水屋(1)	1	〃	〃
1250	〃 (2)	1	〃	〃
1251	〃 (3)	1	〃	〃
1269	茶碗カゴ	1	奈良市疋田町	前田 安道
B-F 1262	醤油シボリ	1	田原本町新木	松井 忠夫
B-G 1164	手桶(酒造用)	1	奈良市元林院町	中川 巖吉
1260	ハト	1	奈良市法華寺町	塚本 雅信
B-I 1177	保温飯フゴ	1	天理市檜町	松山 隆
1254	食器	1	桜井市大泉	中村 潔
1255	〃	1	〃	〃
1256	〃	1	〃	〃
1257	〃	1	〃	〃
1259	箱膳	1	〃	〃
1268	茶碗	61	奈良市疋田町	前田 安道
1270	黒膳	1	〃	〃
1271	〃	1	〃	〃
1272	〃	1	〃	〃
1273	〃	1	〃	〃
1274	〃	1	〃	〃
1275	〃	1	〃	〃
1276	〃	1	〃	〃
1415	ワゲモノ(ワッパ)	1	下北山村寺垣内	中村 秀一
(C) 住居				
C-D 1163	火器用瓦製部品	1	奈良市元林院町	中川 巖吉
1165	提灯箱	2	〃	〃
1175	柿渋張りボテコ	1	天理市檜町	松山 隆
1176	〃	1	〃	〃
1224	ランプ	1	野迫川村柞原	倉橋 嘉明
1225	〃	1	〃	〃
1243	タンス(1)	1	桜井市大泉	中村 潔
1244	〃 (2)	1	〃	〃
1245	〃 (3)	1	〃	〃
1246	フンタンス	1	〃	〃
1247	タンス(4)	1	〃	〃
1252	戸棚	1	〃	〃
1263	ボテコ	1	奈良市疋田町	前田 安道
1264	ヌリ下駄箱	1	〃	〃
1265	ツヅラ	1	〃	〃
1266	〃	1	〃	〃
1267	〃 (大)	1	〃	〃



C-E	1178	マクラ	1	天理市檜町	松山 隆
	1216	〃	1	野迫川村柞原	倉橋 嘉明
	1217	〃	1	〃	〃
■ 生産・生業 ■					
(D) 農 耕					
D-C	1174	柿渋張りクライヌケ	1	天理市檜町	松山 隆
	1237	箕	1	桜井市大泉	中村 潔
	1238	〃	1	〃	〃
	1239	トオシ	1	〃	〃
	1240	〃	1	〃	〃
	1241	キ ネ	1	〃	〃
	1242	〃	1	〃	〃
	1394	板 箕	1	下北山村寺垣内	中門 實
D-D	1167	野神祭の牛	1	天理市新泉町	山澤 義治
	1168	〃 馬	1	〃	〃
	1169	〃 ムカデ	1	〃	〃
	1170	〃 農具模型	3	〃	〃
	1171	シャカシャカ祭の蛇	1	橿原市上品寺町	区 代 森村井義信
	1172	蛇まき行事の模擬農具	5	田原本町 鍵	鍵自治会長竹村 治
(E) 山 樵					
E-C	1234	木回し	1	野迫川村今井	東辻 末広
	1236	ヨ キ	1	〃	〃
(J) 染 織					
J-A	1516	染 糸	1	月ヶ瀬村尾山	杉生 隆三
J-C	1151	割込帳	1	橿原市膳夫町	塩見 聖策
J-D	1513	スクモ (藍)	1	月ヶ瀬村尾山	杉生 隆三
	1515	染 料	1	〃	〃
J-E	1512	藍染カゴ	2	〃	〃
	1514	カイ棒	1	〃	〃
(K) 手工・製造					
K-B	1162	奈良晒反物仕上用圧縮器	1	奈良市元林院町	中川 巖吉
	1173	柿渋製作用具一式	6	大和郡山市小泉町	森田 恒一
	1197	箸づくり用セン	1	野迫川村立里	辻田 欣弘
	1198	オシガンナ	1	〃	〃
	1199	中シコカンナ	1	〃	〃
	1200	シアゲカンナ	1	〃	〃
	1201	中シコカンナ	1	〃	〃
	1202	シヤコ	1	野迫川村柞原	倉橋 嘉明
	1203	ハウチョウ (大)	1	〃	〃
	1204	〃 (小)	1	〃	〃
	1205	メタテ	1	〃	〃
	1206	豆腐のモロブタ	2	〃	〃
	1207	袋 (荒目)	2	〃	〃
	1208	〃 (細目)	4	〃	〃
	1209	乾燥板	6	〃	〃
	1210	簀	3	〃	〃
	1212	コマイタ	4	〃	〃
	1303	吉野葛製作用カイ棒	1	大宇陀町上新	黒川重太郎
	1304	〃 移し台	1	〃	〃
	1425	コンニャクのユガキナベ	1	下市町仔邑	大川 正智
	1426	〃 アワセナベ	1	〃	〃
	1427	〃 型箱	1	〃	〃
	1470	糝蓋製作用アテ台	1	下市町下市	冷水朝次郎
	1471	〃 クギ入台	1	〃	〃
	1472	〃 正直ガンナ	1	〃	〃
	1473	糝蓋の裏板と竹クギ	2	〃	〃

	1474	杵 蓋	1	下市町下市	冷水朝次郎
(L) 諸 職	1518	奈良団扇製作用具	395	奈良市三条町	永室 幸子
L-B	1160	イレギワ (桶屋用ヤリガンナ)	1	下市町栄町	大西 康弘
	1179	コ テ	1	大宇陀町大熊	隅田 隆蔵
	1180	ハサミ	1	〃	〃
	1181	ヤマノコ	1	野迫川村今井	東辻 藤作
	1182	〃	1	〃	〃
	1183	ヨ キ	1	〃	〃
	1184	クサビ	1	〃	〃
	1185	カンナ	1	〃	〃
	1186	ノ コ	1	〃	〃
	1187	カンナ台	1	〃	〃
	1188	カンナ刃	1	〃	〃
	1189	ウケイタ	1	〃	〃
	1190	ジャッキ	1	〃	〃
	1191	コブラノコ	1	〃	〃
	1192	ハバタチ	1	〃	〃
	1193	コグチギリ	1	〃	〃
	1194	カンナ	1	〃	〃
	1195	ジャッキのアテ板	1	〃	〃
	1196	経木見本	10	〃	〃
	1227	ジャッキ	1	野迫川村今井	山本ヨシノ
	1228	ジャッキのアテ板	1	〃	〃
	1229	〃	1	〃	〃
	1230	〃	1	〃	〃
	1231	〃	1	〃	〃
	1232	カンナ台	1	野迫川村今井	東辻 末広
	1233	ツッキリ	1	〃	〃
	1235	切り回し	1	〃	〃
	1305	包 丁	1	大宇陀町上新	東 〃 庄作
	1306	三ツ目切り	1	〃	〃
	1307	〃	1	〃	〃
	1308	〃	1	〃	〃
	1309	〃	1	〃	〃
	1310	ドリル	1	〃	〃
	1311	ノ ミ	1	〃	〃
	1312	ノコギリ	1	〃	〃
	1313	〃	1	〃	〃
	1314	鎌	1	〃	〃
	1315	〃	1	〃	〃
	1316	〃	1	〃	〃
	1317	〃	1	〃	〃
	1318	スミツボ	1	〃	〃
	1319	カンナ	1	〃	〃
	1320	〃	1	〃	〃
	1321	〃	1	〃	〃
	1322	〃	1	〃	〃
	1323	〃	1	〃	〃
	1324	〃	1	〃	〃
	1325	〃	1	〃	〃
	1326	〃	1	〃	〃
	1327	〃	1	〃	〃
	1328	竹製油ツボ	1	〃	〃
	1329	割包丁	1	〃	〃
	1330	〃	1	〃	〃
	1331	タガシメの木	6	〃	〃

1332	カンナの替刃	1	大宇陀町上新	東 庄作
1333	槌	1	〃	〃
1334	セ ン	1	〃	〃
1335	包 丁	1	〃	〃
1336	セ ン	1	〃	〃
1337	〃	1	〃	〃
1338	ヤリガンナの刃	1	〃	〃
1339	イレギワ	1	〃	〃
1340	コガマ	1	〃	〃
1341	ナ タ	1	〃	〃
1342	毛ビキ	1	〃	〃
1343	イレギワ	1	〃	〃
1344	ブンマワシ	1	〃	〃
1345	ノコギリ	1	〃	〃
1346	セ ン	1	〃	〃
1347	〃	1	〃	〃
1348	センの刃	1	〃	〃
1349	割包丁	1	〃	〃
1350	刃	1	〃	〃
1351	〃	1	〃	〃
1352	パール	1	〃	〃
1353	〃	1	〃	〃
1354	セ ン	1	〃	〃
1355	〃	1	〃	〃
1356	刃	1	〃	〃
1357	セ ン	1	〃	〃
1358	正直台	1	〃	〃
1359	正直台の刃	1	〃	〃
1360	正直台	1	〃	〃
1361	〃	1	〃	〃
1362	ウルシベラ削りガタナ	1	大和郡山市北郡山町	和田 ウサ
1363	ツ チ	2	〃	〃
1395	サシモノ用カンナ (大)	1	下北山村寺垣内	中村 秀一
1396	〃 (大)	1	〃	〃
1397	〃 (大)	1	〃	〃
1398	〃 (大)	1	〃	〃
1399	〃 (小)	1	〃	〃
1400	〃 (小)	1	〃	〃
1401	〃 (小)	1	〃	〃
1402	〃 (小)	1	〃	〃
1403	〃 (小)	1	〃	〃
1404	〃 (小)	1	〃	〃
1405	〃 (小)	1	〃	〃
1406	〃 (小)	1	〃	〃
1407	チョンナ	1	〃	〃
1408	製品製作型板	1	〃	〃
1409	〃	1	〃	〃
1410	〃	1	〃	〃
1411	〃	1	〃	〃
1412	〃	1	〃	〃
1413	桶つくり道具	2	〃	〃
1414	屋根葺道具ノコギリ	1	〃	〃
1417	屋根葺道具板ゴテ	1	榛原町諸木野	吉岡 忠雄
1418	〃 藁ゴテ	1	〃	〃
1419	〃 カマ	1	〃	〃
1420	〃 直ハサミ	1	〃	〃

1421	テリハサミ	1	榛原町諸木野	吉岡 忠雄
1422	ハ リ	2	〃	〃
1428	正直カンナ	1	下市町田中	松谷一二三
1429	カリワ	6	〃	〃
1430	外マルカンナ	1	〃	〃
1431	木ワリ	1	〃	〃
1432	セ ン	1	〃	〃
1433	外ゼン	1	〃	〃
1434	内ゼン	1	〃	〃
1435	内マルカンナ	1	〃	〃
1436	コグチカンナ	1	〃	〃
1437	〃	2	〃	〃
1438	ノコギリ	1	〃	〃
1439	セ ン	1	〃	〃
1440	外回シノコ (引回シノコ)	1	〃	〃
1441	ゲンノ	1	〃	〃
1442	木ヅチ	2	〃	〃
1443	アブラボウズ	1	〃	〃
1444	アリヒキ	1	〃	〃
1445	ブンマワシ	1	〃	〃
1446	セ ン	2	〃	〃
1447	ソコカンナ	1	〃	〃
1448	ナカマル	1	〃	〃
1449	カンナ	1	〃	〃
1450	カンナ	1	〃	〃
1451	アトリ	1	〃	〃
1452	毛ビキ	1	〃	〃
1453	アリザン	2	〃	〃
1454	外ガンナ	1	〃	〃
1455	ノ ミ	2	〃	〃
1456	コグチカンナ	2	〃	〃
1457	外ゼン	1	〃	〃
1458	〃	1	〃	〃
1459	内ゼン	1	〃	〃
1460	カンナの刃	2	〃	〃
1461	ペンチ	1	〃	〃
1462	マンリキ	1	〃	〃
1463	シメギ	3	〃	〃
1464	台ナオシカンナ	1	〃	〃
1465	キ リ	1	〃	〃
1466	ボウトギリ	1	〃	〃
1467	ケジメノコ	1	〃	〃
1468	ハラアテ	1	〃	〃
1469	ウ マ	1	〃	〃
1475	ウルシノバシバケ (ヘラ)	1	下市町下市	上田 梅吉
1476	ウルシヌリバケ	6	〃	〃
■ (M) 交通・運輸・通信 ■				
M-B	1226	チンチョウ	1	野迫川村柞原 平野 元丸
M-E	1152	御宿のフダ	1	明日香村岡 村井喜久治
■ (N) 交易 ■				
N-C	1517	棹ハカリ	2	奈良市東包永町 岡本 務
N-D	1364	ヌシヤ看板	1	大和郡山市北郡山町 和田 ウサ
■ (O) 社会生活 ■				
O-B	1290	尼講食器	22	奈良市佐紀東町 村田 善一
	1291	膳	10	〃 〃
	1292	椀	120	〃 〃

O-C	1161	小型竜吐水	1	奈良市元林院町	中川 巖吉
O-G	1365	古文書1)	1	奈良市法華寺東町	辰己 義松
	1366	〃 (2)	1	〃	〃
	1367	〃 (3)	1	〃	〃
	1368	〃 (4)	1	〃	〃
	1369	〃 (5)	1	〃	〃
	1370	〃 (6)	1	〃	〃
	1371	〃 (7)	1	〃	〃
	1372	〃 (8)	1	〃	〃
	1373	〃 (9)	1	〃	〃
	1374	〃 (10)	1	〃	〃
	1375	〃 (11)	1	〃	〃
	1376	〃 (12)	1	〃	〃
	1377	〃 (13)	1	〃	〃
	1378	〃 (14)	1	〃	〃
	1379	〃 (15)	1	〃	〃
	1380	〃 (16)	1	〃	〃
	1381	〃 (17)	1	〃	〃
	1382	〃 (18)	1	〃	〃
	1383	〃 (19)	1	〃	〃
	1384	〃 (20)	1	〃	〃
	1385	〃 (21)	1	〃	〃
	1386	〃 (22)	1	〃	〃
	1387	〃 (23)	1	〃	〃
	1388	古文書1)	1	御所市御所国鉄駅前通	松浦 士郎
	1389	〃 (2)	1	〃	〃
	1390	〃 (3)	1	〃	〃
	1391	〃 (4)	1	〃	〃
	1392	〃 (5)	1	〃	〃

■ (P) 信仰 ■

P-B	1477	庚申講掛軸1)	1	大和郡山市小泉町	井村 良襄
	1478	〃 (2)	1	〃	〃
	1479	〃 (3)	1	〃	〃
	1480	〃 (4)	1	〃	〃
	1481	〃 (5)	1	〃	〃
	1482	〃 (6)	1	〃	〃
	1483	〃 (7)	1	〃	〃
	1484	〃 (8)	1	〃	〃
	1485	〃 (9)	1	〃	〃
	1486	〃 (10)	1	〃	〃
	1487	〃 (11)	1	〃	〃
	1488	〃 (12)	1	〃	〃
	1489	〃 (13)	1	〃	〃
	1490	〃 (14)	1	〃	〃
	1491	〃 (15)	1	〃	〃
	1492	〃 (16)	1	〃	〃
	1493	〃 (17)	1	〃	〃
	1494	〃 (18)	1	〃	〃
	1495	〃 (19)	1	〃	〃
	1496	〃 (20)	1	〃	〃
	1497	〃 (21)	1	〃	〃
	1498	〃 (22)	1	〃	〃
	1499	〃 (23)	1	〃	〃
	1500	〃 (24)	1	〃	〃
	1501	〃 (25)	1	〃	〃
	1502	〃 (26)	1	〃	〃

	1503	庚申講掛軸27	1	大和郡山市小泉町	井村 良襄
	1504	〃 (28)	1	〃	〃
	1505	〃 (29)	1	〃	〃
	1506	〃 (30)	1	〃	〃
	1507	〃 (31)	1	〃	〃
	1508	〃 (32)	1	〃	〃
	1511	十一面観音講掛軸	1	〃	〃
P-C	1277	六斎念佛用具フセガネ(小)	1	奈良市佐紀東町	村田 善一
	1278	〃 フセガネ	1	〃	〃
	1279	〃 カネ	1	〃	〃
	1280	〃 カネ打棒	1	〃	〃
	1281	〃 カネ	1	〃	〃
	1282	〃 カネ打棒	1	〃	〃
	1283	六斎念佛太鼓	1	〃	〃
	1284	〃	1	〃	〃
	1285	〃	1	〃	〃
	1286	〃	1	〃	〃
	1287	〃	1	〃	〃
	1288	〃	1	〃	〃
	1289	六斎念佛太鼓用バチ	11	〃	〃
P-G	1215	大峯講の看板	1	野迫川村柞原	倉橋 嘉明
	1261	錫 杖	1	奈良市法華寺町	塚本 雅信
	1293	山上講祭具箱	1	奈良市佐紀町	城本 勢次
	1294	御本尊屏風	1	〃	〃
	1295	掛 軸	1	〃	〃
	1296	コトボシ	1	〃	〃
	1297	鈴	1	〃	〃
	1298	花 立	1	〃	〃
	1309	ローソク立	1	〃	〃
	1300	センコウ立	1	〃	〃
	1301	ヒョウシギ	1	〃	〃
	1302	錫 杖	1	〃	〃
	1509	庚申講掛軸箱	1	大和郡山市小泉町	井村 良襄
	1510	庚申講供え物机	1	〃	〃
■ (Q) 民俗知識 ■					
Q-A	1154	書 籍	19	大和郡山市南鍛冶町	平野 貴司
	1213	矢 立	1	野迫川村柞原	辻本 元士
	1218	書 籍	1	野迫川村柞原	倉橋 嘉明
	1219	〃	1	〃	〃
	1220	〃	1	〃	〃
	1221	〃	1	〃	〃
	1222	〃	1	〃	〃
	1223	〃	1	〃	〃
	1253	折りたたみ机	1	桜井市大泉	中村 潔
Q-C	1153	ハエトリ器	1	大和郡山市南鍛冶町	平野 貴司
Q-E	1416	磁 石	1	下北山村寺垣内	中村 秀一
■ (R) 民俗芸能・娯楽・遊戯 ■					
R-H	1393	一本タタラ	2	上北山村河合	射場キヨ子
	1423	出雲人形	12	桜井市出雲	水野美津子
	1424	出雲人形半製品	5	〃	〃
■ (T) 年中行事 ■					
T-D	1155	内裏ビナ (1対)	2	大和郡山市城北町	奥村 信幸
	1156	屏 風	1	〃	〃
	1157	人 形 (1対)	2	〃	〃
	1158	小型ホッカイ (1対)	2	〃	〃
	1159	膳 椀	10	〃	〃

寄贈図書目録

(54年10月から)
(55年10月まで)

〈書名〉	〈巻数〉	〈寄贈機関名〉	〈書名〉	〈巻数〉	〈寄贈機関名〉
【紀要・報告書】			紀伊熊野市の民俗養生町神川町編		大谷大学民俗学研究会
北海道開拓記念館研究報告5		北海道開拓記念館	大谷女子大学資料館報告書2、3		大谷女子大学資料館
北海道開拓記念館調査報告19		同上	割箸今昔		阪口宏司氏
釧路市立郷土博物館紀要2～7		釧路市立郷土博物館	古文書調査報告		神戸市教育委員会
知床博物館研究報告2		斜里町立知床博物館	出土遺物の保存74		元興寺文化財研究所
博物館施設に於ける学習活動調査報告書		苫小牧市青少年センター	民俗資料等保存処理調査研究報告書78、79		同上
調査研究年報5		青森県立郷土館	金峯山寺二王像像内民俗資料緊急調査報告書		同上
青森県立郷土館調査報告7		同上	国東仏教民俗資料調査概報		同上
研究紀要6		東北歴史資料館	奈良県文化財調査報告第33集		奈良県教育委員会
東北文化研究所紀要11		東北学院大学東北文化研究所	重要文化財中橋家住宅修理工事報告書		同上
秋田県立博物館研究報告5		秋田県立博物館	重要文化財中の坊書院修理工事報告書		同上
会津の漆蠟の製作工程とその用具		渡部聖氏	重要文化財書院修理工事報告書		同上
縄文化前と民具考1		同上	奈良県文化財調査報告書31、34		同上
脇ノ谷古墳		白浜町教育委員会	奈良県史跡名勝天然記念物調査報告		
栃木県の稲作習俗		栃木県立郷土資料館	29、32～34、36、37、40、41		奈良県立橿原考古学研究所
群馬県立歴史博物館紀要1		群馬県立歴史博物館	唐古、鎌遺跡		同上
研究調査報告書7		浦和市立郷土博物館	二上山、桜ヶ丘遺跡		同上
埼玉県立博物館紀要6		埼玉県立博物館	奈良県遺跡調査概報1977、1978		同上
埼玉県立歴史資料館研究紀要2		埼玉県立歴史資料館	奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ		同上
埼玉県遺跡発掘調査報告書32		同上	紀要考古学論叢第3冊		同上
研究員紀要2		千葉県立上総博物館	桜井女子短期大学紀要2		桜井女子短期大学
史料館研究紀要12		国立史料館	天理大学学报124～128		天理大学学術研究会
石川日記1		八王子郷土資料館	奈良大学紀要8		奈良大学
府中市立郷土館紀要6		府中市立郷土館	地理学研究報告1979		奈良女子大学文学部地理学教室
府中市自然調査報告第9次調査		同上	研究報告2		岡山県立博物館
先史10千葉・南総中学遺跡		駒沢大学考古学研究室	広島大学文学部紀要第15号上下		広島大学
民俗探訪昭和54年度		国学院大学民俗学研究会	山口県立山口博物館研究報告6		山口県立山口博物館
民俗学研究所紀要4		成城大学民俗学研究所	宇和島地方の化石		愛媛県立博物館
上小阿仁の民俗		東洋大学民俗学研究会	瀬戸内の海上信仰調査報告2冊		瀬戸内海歴史民俗資料館
武蔵大学日本民俗史演習調査報告Ⅱ、Ⅲ		武蔵大学人文学科日本民俗史演習	瀬戸内の海史資料調査報告第2集		同上
調査報告5、6		日本常民文化研究所	大野城市の文化財12		大野城市教育委員会
神奈川県民俗調査報告9		神奈川県立博物館	大野城市文化財調査報告書3		同上
家と村Ⅲ平塚市旧真田村		平塚市博物館	研究紀要昭和54年度		宮崎県総合博物館
平塚市博物館研究報告3		同上	曾於北始良地区有形民俗資料調査報告書		
佐渡の民家		新潟県教育委員会	鹿児島県明治百年記念館建設調査室		沖繩県立博物館
小松市立博物館研究紀要第16集		小松市立博物館	総合調査報告書Ⅰ粟国島		
岐阜県博物館調査研究報告1		岐阜県博物館	【雑誌】		
四之宮下ノ郷調査概報		湘南砂丘遺跡研究会	アイヌ文化		アイヌ無形文化伝承保存会
沼津市歴史民俗資料館紀要4		沼津市歴史民俗資料館	秋田民俗6、7		秋田県民俗学研究会
資料集2古文書2		同上	磐城民俗20、21		磐城民俗研究会
蒲郡の民具10		蒲郡市教育委員会	福島民俗7、8		福島県民俗学会
名古屋博物館研究紀要3		名古屋博物館	埼玉民俗		埼玉民俗の会
リトルワールド研究報告4		リトルワールド	秩父民俗14		秩父民俗研究会
木綿の道具		知多市民俗資料館	エナジー対話14、15、16		エッススタンダード石油KK
知多木綿		同上	国際交流24、25		国際交流基金
滋賀県民俗地図昭和53年度		滋賀県教育委員会	民具マンスリー12巻1号～13巻7号		日本常民文化研究所
資料館紀要8		京都府立総合資料館	西郊民俗84～93		西郊民俗談話会
京都の田遊び調査報告書		京都府教育委員会	仏教と民俗16		仏教民俗学会
研究報告4巻2号～4巻4号		国立民族学博物館	民芸手帖昭和53年9月～昭和55年10月		東京民芸協会
国内資料調査委員調査報告集1		同上	太陽6月号親と子の博物館200		平凡社
大阪市立博物館研究紀要12		大阪市立博物館	歴史手帖6巻9号～8巻10号		名著出版
大阪城天守閣紀要8		大阪城天守閣	史正5～9		史正会
埋蔵文化財包蔵地調査概報19～21		東大阪市教育委員会	古文化財之科学22、23		古文化財科学研究会
三宅遺跡		松原市教育委員会	月刊文化財10月号		吉田靖氏
十津川郷の丸田家文書の報告		日本民家集落博物館	文化庁月報134		文化庁
天見・流谷の民家		河内長野市教育委員会	民俗と歴史7、8、9		民俗と歴史の会
明ハ塚周濠部試掘調査報告書		大阪文化財センター	歴史読本昭和55年2月号		新人物往来社
脇浜・島中・石才近義堂遺跡試掘調査報告書		同上	中野の文化財No.4なかのの碑文		中野区教育委員会
鷹塚山遺跡調査概要報告Ⅲ		枚方市教育委員会	Museion 24、25		立教大学
			人間の真理昭和55年6月号		明玄書房

〈書名〉	〈巻数〉	〈寄贈機関名〉	〈書名〉	〈巻数〉	〈寄贈機関名〉
女性の部屋昭和55年9月号		中央通信社	江戸川区の民俗		江戸川区郷土資料館
まつり文化4		まつり文化の会	八王子の土、師器		八王子市郷土資料館
民俗		相模民俗学会	町田の古墳文化展		町田市立博物館
民俗学論叢創刊号		同上	みの、かき、ぼんどり展		同上
人類文化創刊号第2号		人類文化研究会	仏教美術展		同上
高志路252~256		新潟県民俗学会	緑の散歩道		府中市立郷土館
とやま民俗20、21		富山民俗の会	羽村の民具		羽村町教育委員会
加能民俗8の2~8の9		加能民俗の会	調布の米づくり		調布市立郷土館
加能民俗研究7、8		同上	調布の麦づくり		同上
えちぜんわかさ5、6		福井民俗の会	寛文朱印留上下		国立史料館
上田盆地19		上田民俗研究会	日本民俗地図Ⅵ解説書		文化庁
信濃第31巻第10号		信濃史学会	憲政史特別展		寛政記念館
美濃民俗117~159		美濃民俗文化の会	北陸の仮面		石川県立郷土資料館
まつり通信192~236		まつり同好会	宝暦治水と薩摩藩		岐阜県博物館
びぞん64~66		美術文化史研究会	はきもの		静岡市立登呂博物館
びぞん通信30、49、51、52、56~57		同上	沼津のあけぼの		沼津市歴史民俗資料館
リトルワールド1~22		リトルワールド	フランス絵画の巨匠たち		名古屋市立博物館
モンキー164~172		日本モンキーセンター	城下町の文化名古屋のやきもの		同上
フォクローア41~43		伊勢民俗学会	よみがえる戦国		同上
志摩国風土記1		志摩民俗資料館	東海古墳時代		同上
民俗文化160~204		滋賀民俗学会	常設展尾張の歴史展示解説Ⅰ		同上
近江地方史研究7~9		近江地方史研究会	近江の瓦		滋賀県立近江風土記の丘資料館
茶道文化研究第2輯		今日庵文庫	戦国時代の城郭と館		同上
朱23、24		伏見稲荷大社	常設展図録		同上
染織マンスリー昭和54年1月号		昭和55年12月号	小倉遊亀展図録		滋賀県立琵琶湖文化館
		染織と生活社	同上		同上
左海民俗44、46~49		小谷方明氏	室町時代の文化図録		京都国立近代美術館
堺の文化財12、20		同上	フランス絵画の巨匠たち		京都府立丹後郷土資料館
大阪文化誌13		大阪文化財センター	くらしの文化財		同上
千里民俗12		関西大学民俗学研究会	丹後の歴史と文化		同上
月刊みんぱく第3巻6号~第4巻9号		国立民族学博物館	丹後国分寺		同上
日本の民芸276~301		日本民芸館	紙をすく村		同上
ニューライフ昭和53年9月号		昭和55年10月号	京都の絵馬		京都府立総合資料館
		ニューライフ	京都の医学史		宗田一氏
御影通信23~37		御影史学研究会	京都の医学史資料篇		同上
御影史学論集5、6		同上	日本の医療文化史Ⅰ		同上
市原地方史研究第9号		市原教育委員会	吉野の民俗誌		林宏氏
鳥兔21、22		平群史蹟を守る会	堺鑑		小谷方明氏
近畿民俗76~85		近畿民俗学会	大阪府民具図録		同上
古代研究16~20		元興寺文化財研究所	戦国合戦図屏風図録		大阪城天守閣
聖徳81~85		法隆寺友の会	明治の錦絵新聞		同上
天地第2巻8号~第3巻5号		天理教道友社	象狩りをした人たち		大阪市立自然史博物館
南都仏教39~44		東大寺南都仏教研究会	ケモノと恐竜の化石		同上
県政奈良145~212		奈良県広報課	神戸の民俗芸能垂水篇		神戸市教育委員会
マイ奈良43~46		リーダーズサークル	神戸市文献史料第2巻		同上
読売奈良ライフ9、12~34		読売奈良ライフ	岡方文書第1輯第1巻、2巻		同上
日本文化史研究第3号		帝塚山短期大学日本文化史学会	国分寺		奈良国立博物館
奈良文化研究2巻2号、3巻1号		桜井史談会	飛鳥時代の古墳		奈良国立文化財研究所
社会教育研究昭和54年度		津山社会教育文化財団	初期南画の展開		奈良県立美術館
岡山民俗122~140		岡山民俗学会	奈良のあゆみ		奈良市史編集室
広島民俗10~14		広島民俗学会	能楽と奈良		同上
山陰民俗31、33、34		山陰民俗学会	雅楽と奈良		同上
土佐民俗32~35		土佐民俗学会	改訂天理市史史料編4、5		天理市教育委員会
海南民俗研究3		海南民俗研究所	天理図書館開館五十周年記念展		天理大学付属天理図書館
鹿児島民俗68~72		鹿児島民俗学会	斑鳩町史・続史料編		斑鳩町教育委員会
しまうた6、7		しまうた文化研究会	わたしたちの大和郡山市		大和郡山市教育委員会
【単行本・図録】			わたしたちの御所町		御所市教育委員会
教科書と子どもたち		北海道開拓記念館	わたしたちの平群町		平群町教育委員会
米づくりと農具		東北歴史資料館	古寺巡礼奈良16松尾寺		松尾寺
発掘された古代の東北		同上	松尾山の自然		同上
開館記念展群馬のはにわ		群馬県立歴史博物館	臈岐の国		島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
刀剣展		同上	古代への招待		同上
発掘された古代の水田		同上	津山海の探検		津山科学教育博物館
常設展示解説		同上	四国の民家と集落1		四国民家博物館
群馬の古鏡		同上	四国村		同上
絵馬		埼玉県立博物館	愛媛県立博物館展示解説		愛媛県立博物館
胎内納入品をもつ仏像		同上	展示品図録		九州大学文学部考古学陳列室
埼玉県立博物館展示解説歴史Ⅱ		同上	北九州文書展		北九州市立歴史博物館
黒潮文化展図録		千葉県立安房博物館	土器		福岡市立歴史資料館
海女の歴史		千葉県立安房博物館	日向の古墳展		宮崎県総合博物館
遠山の民俗		東京学芸大学民俗学研究会	琉球のシダ植物		沖縄県立博物館
遠山の祭—1974—		同上			
台東北の明治、大正、昭和		台東区教育委員会			

御田祭の祭具

大宮守人

(前号よりつづく) 単位cm

大和神社 (天理市新泉)

- 鍬 柄長 112 柄尻 3.1φ
平頭幅 .14 先幅 14.5 先高 33.2
(柄松、先杉、先端鉄部墨描)
- 犁 高さ 55.3 床長 57.5
行き 127.5 床先幅 12
(松、杉 先端鉄部墨描)
- 耙 高さ 53.0 行き 56
幅 76.5 歯突出部 4.3 (11本 2寸洋クギ使用)
- 箕 口幅 33.0 奥行き 24.0 (竹製 アジロ編み)
高さ 10.5
- 唐櫃 たて 48.4 よこ 30 (フタなし、桧製)
深さ 30 足付全高 43.8
- 牛頭 (大) 桧製箱型黒漆塗

和爾下神社 (天理市樺本)

- 鍬 柄長 117.8 柄尻 3.3φ
平頭幅 5.8 先幅 13.8 先高 29
(桧製 先端鉄部墨描)
- 鋤 高さ 77 平頭幅 15.5
先長 31.5 握手幅 15.3
(桧製 先端鉄部墨描)
- 犁 高さ 75 床長 71
行き 163 床先幅 15.5
- 耙 高さ 63.5 行き 48
幅 67.3 歯突出部 10.7(7本)
- 箕 口幅 49.5 奥行き 44.5 (竹製アジロ編み)
高さ 20.0
- 牛頭 (大) 内部くり貫き墨色

春日大社 (奈良市春日野町)

- 鍬 柄長 115.8 柄尻 2.8
先高 23.5 平頭幅 12.0 先幅 11.5 (桧製)
- 犁 高さ 61.5 床長 76.5
行き 164.5 床先幅 11.1
- 机 柄長 145.5 柄尻 2.5×2.7 (桧製)
先幅 57.5 先高 11.1 先板厚 2.5
- 桶 口 52.1φ 深さ 14.5 (曲物桧製 御田植祭
福種被桶の墨書あり)
- 苗籠 竿長 142.5 (竹製、籠は六ツ目、前後に2つ)
籠 39.5φ
- 耙 高さ 65.5 行き 66.0
幅 79.4 歯突出部 9.5 9本
口 29.0
奥行き 22.5 高さ 10.0
(小型アジロ編 田舞における種蒔の所作用)
- かえる籠 縦 34.5
幅 19.0
(上部 8.5cmのみアジロ編 桧製)
- あさうら (田舞における御巫の履物、足袋に鼻緒
のない雪駄を縫いつけたもの)
- 編木(ささら) すり棒 長さ 47.5
太さ 3.0φ
ささら竹 長さ 59.0
太さ 2.8φ
- 銅拍子 1 対 (鉄製)

以上、5神社の御田植祭の祭具を紹介してきたが、紙面の関係上他の資料は省略する。

★★★★ お知らせ ★★★★★

●民俗博物館の行事

4月1日より重要文化財旧岩本家住宅を一般公開します。

⁵⁶4月8日～9月27日

テーマ展「日々のくらし—台所の民俗展—」

6月28日 体験学習講座〈カゴづくり〉

※56年度より同講座(特集を除く)時間が午後1時～午後4時までと変わり、参加者全員が作り終るよう配慮し応募制とし先着定員40名とします。

7月～11月 第2回民俗学カルチャーサロン

※同サロンの日程・内容については、6月段階で公募する予定ですので、その頃にお問い合わせ下さい。

8月1日～2日 体験学習講座・夏休み親と子の特集〈昔の竹の遊び用具づくり〉

午前10時30分から午後3時30分まで

《表紙説明》

ひところ、カゴ製品の多くはプラスチック製品にとって変わられ、日常生活から姿を消しつつあったが、最近では、竹ザルのよさがみなおされ、生活用具として復活しつつある。写真は山添村中峯山にて撮影。

■編集後記■

雪の多い春さきとなった。東大寺のお水取りが近づく頃から寒さが一層厳しさを増す。そして、例年になく寒い朝を幾度か迎えた2月末から3月初。だが、自然界から春のきざしが感じられる。

館だよりを発刊して、もう7年目に入ろうとする。編集子も二人目である。そして、むつかしい館だよりだ、といわれて7年にもなる。気軽に読める広報誌へのころも変えも企画にあり、新しい感覚を吹き込まねば……。こんな昨今、新しい感覚によって編集子退場の一瞬を与えられたと思う。(★)